

トレイラー 2 歴史の中の景観 多様な顔をもつ鞆の町

歴史の中で鞆の町は、さまざまな意味をもっていました。それは鞆の町を見下ろす高台に立ってみるとよくわかります。近世のはじまる頃から瀬戸内海の海上交通が発達するにつれ、鞆の持つ意味が少しずつ変化してきました。瀬戸内海を縦横に活躍する水軍の拠点として、遙か四国を見渡すことのできる大可島の意味は大きかったと思われますし、江戸時代、鞆の民を支配し、海上交易を一手に納める鞆城主は鞆湾全体を見渡せる場所が必要であったと思われます。多様なビューポイントから鞆を眺めると、鞆の町はそれぞれの時代に応じて多様な顔を持っていたことがわかります。

水軍の砦・大可島城からの眺め

支配の景観・鞆城址からの眺め

海の民の象徴・医王寺

旅人が見た鞆・海上からの眺め

近世の都市計画・寺町の形成

トレイル-2 歴史のなかの景観 - 多様な顔をもつ鞆の町



■ 図中の数字は、本編中の※の数字に対応します。

2. 水軍の砦・大可島城からの眺め

「大可島山頂」¹¹からは、足下に從える鞆の街と港を除いて、遠く四国に至るまでの瀬戸内の海と島々の広がりを一望することができます。ここに砦を築けば、目の前の瀬戸海の往来のすべてに睨みをきかせることが可能になります。

大可島城は、鎌倉末期から南北朝期に築かれたといわれています。現在では陸続きとなっていますが、当時は鞆の街との間も水道で分かたれていて、文字通り「大可島」という島でした。¹⁾

水上交通の要所であり、海で囲まれた難攻不落の大可島は、水軍の拠点として戦略上他に得難い地であったのです。

事実古来より鞆の水軍は瀬戸内の戦いにかかわり、その勝敗に大きな役割を果たしてきました。なかでも、「足利幕府は鞆に興き鞆に亡ぶ」といわれるように、足利氏の盛衰に大きな役割を果たしています。

建武3年(1336年)、足利尊氏は、後醍醐天皇の親政に反旗を翻します。しかし、新田義貞や楠木正成に敗れて、京都を追われて水路で九州を目指して落ちてゆきます。その途上に鞆の浦の「小松寺」³²に逗留し、光厳上皇の院宣を手にします。その院宣を抛りどころに九州で勢力を盛り返し、再び京都に攻めのぼりますが、その際、鞆に武将を集結させて軍議をしています。

正平4年(1349年)には、足利尊氏の子で、尊氏の弟直義の養子であった足利直冬^{ただふゆ}が、長門探題として西に下り大可島城に入城します。しかし、足利尊氏、高師直^{こうのもろなお}・師泰^{もろやす}兄弟と足利直義が対立し、直義が失脚します。そのため、直冬は備後の尊氏方から攻撃され、九州へ落ちてゆくこととなるのです。

こうした足利一族の軍勢は、畿内と九州との往来に際して、常に鞆を抛り所としながら海路を用いますが、その背景には足利氏に從い奮戦する鞆水軍がいたと思われます。

戦国時代には、毛利勢力下にあった村上水軍の一族が、大可島城を拠点として鞆を押さえます。信長に追われた最後の将軍義昭が、毛利氏を頼り落ちて行く先を鞆としたのも、先祖に忠節を献げてくれた鞆の水軍の存在が心に浮かんだのではないのでしょうか。

1) 関ヶ原合戦の後、安芸・備後の国主となった福島正則が鞆城を築城した際に、大可島は今日のような陸続きとなり、大可島城は廃城となった。

【こぼれ話】 大可島の名前は、対ヶ島に由来すると言いますが、鯛ヶ島という説もあります。鯛は古来より鯛の名所として名高いので、こちらの方がふさわしいかもしれません。

ところで、瀬戸内海の各所では、3月中旬から5月初めの満潮時に、鯛が腹を上にして浮ぶ、^{うきだい}浮鯛という現象が見られます。強い潮流や水温変化のせいともいわれますが、原因は定かではありません。足利直冬ら大可島に立てこもった武将たちも、戦いの合間には舟を出し、浮鯛を網で求めて一時の安らぎを楽しんだのでしょうか。



大可島からの眺め

2. 支配の景観・鞆城址からの眺め

鞆城址は、鞆市街の中央にあります。石垣で囲まれた高台に築かれた本丸の跡地は、現在「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」¹⁷の敷地となっています。¹⁾そこから周囲を見渡せば、鞆の港や街の家並みとその彼方に広がる自然景観を一望することができます。

北と西には沼隈半島の山々、東には仙酔島の水道という天然の要害に囲まれ、南の入り江には天然の良港を持っています。さらに、その先には古来より九州・中国大陸と畿内とを結ぶ瀬戸内海の往来が広がり、鞆の地の利の素晴らしさを確かめることができます。

ここに城を置き、城下町を築くことは、瀬戸内の軍事の要所を押さえると同時に、海上からの巨万の富を手にするこも、可能になるのです。

鞆城の築城については諸説ありますが、毛利元就・小早川隆景が天文年間(1532～1555年)に築城したとする説が有力です。このころより水軍の拠り所だけではなく、舟運による物産の集積所としての鞆の持つ力が、明らかになってきたのでしょうか。

慶長5年(1600年)の関ヶ原合戦に敗れた毛利氏は、備後・安芸を追われます。代わりに二国の領主となった福島正則は、鞆城城代大崎玄蕃おびんぼに命じ、鞆城の大修築に取り組みました。

新たな鞆城は、本丸を二之丸・三之丸で囲む近世の城郭で、その縄張りは、東は福禅寺⁸、北は「沼名前神社」³³参道、南は鞆港にまで及ぶものであったといえます。

しかし、未完のまま、元和元年(1615年)の一国一城令によって破却され、元和5年(1619年)に正則も、広島城無断修築を咎められ領地没収され追われてしまいます。

代わって備後に封じられ、福山城を築城した水野勝成は、鞆城跡の館に子の勝俊を置きましたが、その後は、城址には奉行所が置かれ、幕末まで鞆の行政をつかさどることとなります。鞆の街は、城下町から港湾商業都市に姿を変えながら、海上交通の要所として大きく発展してゆきます。

本丸跡の高台に立って鞆の街を眺める際に、完成することがなかった城下町鞆の姿に思いを寄せてみてはいかがでしょうか。

1)「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」の足下には、かつての鞆城石垣の遺構が残されている。天正年間以前の自然石を積み上げた「野面積み」、天正年間以後の、小石をはさみ表面を揃えた「打込みハギ」、江戸初期の切石で表面を揃えた「切込みハギ」と、石垣が築かれた各年代の特徴を読み取ることができる。また、石垣に刻まれた種々の刻印も確認することができる。

【こぼれ話】 鞆城城代となった大崎玄蕃^{げんぱ}が、福島正則に仕え始めた頃、男とも思えるような一人の女が奉公を望みました。玄蕃が「力があるか」と問うと、台所にあった大臼を持ち上げ、相撲を取らせると14人を投げました。玄蕃は、大変喜び召しかかえました。

ところが、この女は男勝りの力持ちですが心根はやさしく、20年の後、福島氏が改易になると家来たちが家財を持ち去るなかで、女は庭から自分が密かにためた大金を掘り出し、玄蕃に差し出しました。他国に行く玄蕃を見送った後、女もいずこへともなく小舟で去ったといひます。



鞆城址からの眺め

2. 海の民の象徴・医王寺¹⁾

「医王寺」²⁷は他の社寺から少し離れた平の集落の山手に位置しています。医王寺までの坂道は少なからず急で遠いのですが、境内からの眺望はその苦勞に十分値するものです。

医王寺の足下の街道沿いには、医王寺を信仰する「平の集落」²⁴が道沿いに細長く広がり、その向こう側に鞆港が大きく弧を描いています。さらに、港の北に広がる鞆の町並みの向こうには、仙酔島が望まれます。晴れた日の早朝にここを訪れば、その景色を茜に染める朝日に出会うこともできます。

医王寺からの景観は、松村呉春²⁾ら、多くの画家の題材にもなっています。

また、文政9年(1826年)に、鞆に寄港したオランダの医師のシーボルトも、植物観察のために医王寺を訪れており、この景観を楽しんだでしょう。

瀬戸内の港街では、平と医王寺、草戸と明王院³⁾のように、集落の山手に社寺を置く、信仰の事例を多く見ることができます。

山手に並び立つ社寺の伽藍は、常に危険に立ち向かう海の民の心の拠り所でした。それとともに、港湾施設が不十分な中世までにあっては、わが港を目指すための大事な目印ともなったでしょう。

さらに、山手に位置している社寺の境内は、いざという時には集落の人々が身を守るための砦として立てこもる場ともなったでしょう。⁴⁾現在の医王寺の壮麗な石垣は、福島正則の鞆城代大崎玄蕃^{ほんぼ}が慶長年間(1600年頃)に修築したのですが、城下の背後を守る砦としての役割に着目したとも考えられています。

海の民である平の人々にとって、医王寺から平の集落とその背後に広がる瀬戸内の海の景観は、何よりもわが集落、海と医王寺との強い結びつきを確かめさせてくれるものであったでしょう。

なお、寺の裏山へ続く小道をしばらく登った所にある太子殿²⁸からの眺望もまた素晴らしいものです。

1) 真言宗桃林山慈眼院医王寺は、平安時代に弘法大師が開基したと伝えられる。本尊である薬師如来像は、室町時代中期の木造仏で県の重要文化財に指定されている。

現存する鐘楼は寛永20年(1642年)に初代福山藩主水野勝成が建立し、本堂は貞享2年(1685年)四代水野藩主勝種の再興したものである。

2) 松村呉春(1752年~1811年)。京都の四条派の始祖。

- 3) 芦田側に面した愛宕山のふもとにあり、かつては常福寺といわれ、弘法大師により 807 年に創建されたと伝承されている。明王院本堂(1321 年建立)、明王院五重塔(1348 年建立)は国宝に指定されている。
- 4) 鞆で争乱がある際には、しばしば小松寺³²等の寺院に陣が設けられている。

【こぼれ話】 医王寺の表参道を約 30m降りた右側に、エレキテルの発明で有名な蘭学者平賀源内の生祠(生存中に神として祭ったもの)があります。源内が遊学先の長崎から故郷の讃岐へ向かう途中に、鞆の溝川家に立ち寄ったことによりました。彼はここで陶土を発見して、オランダの釉薬ゆうやくを使った源内焼の製法を伝えました。溝川家では、陶器作りには手をつけず、鍛冶の火床や壁土の原料としてその陶土を販売しました。溝川家を去るとき源内は、土の神・かまどの神・平賀源内大明神を三宝荒神として祀れまつと言い残して、去っていったといわれています。宝暦 14 年(1764 年)に溝川家がこれを祀まつりました。



医王寺からの眺め

2・ 旅人が見た鞆・海上からの眺め

古来より鞆を訪れる旅人の多くは船便により、鞆の港に入ったと考えられます。旅人が船上から初めて目にする鞆の景色、海から眺めた鞆の港や街とそれを囲む豊かな自然おりなす景観は、画題として大いに魅力的なものでした。江戸期には、歌川広重らが浮世絵のテーマにし、近代では小野竹喬¹⁾、吉田博²⁾ら多くの画家が画題に選んでいます。なかでも吉田博の木版画は傑作として広く世に知られています。

瀬戸内の要衝に位置し天然の良港である鞆港は、常に海上交通の要であり、戦略の要所でした。そのため、鞆の人々は常に海から鞆に来たる人々を意識し、海へ顔を向けた街づくりに取り組んできたのです。

海路より鞆港に入港する旅人は、古来より鞆港西の山手に「医王寺」²⁷や「小松寺」³²の伽藍を仰ぎ見ることができました。中世の旅人は、「大可島」¹¹や今日の鞆城址の砦に立てこもる軍勢を見ることができたでしょう。

慶長年間に福島正則の命により、城代大崎玄蕃が修築した鞆城は、鞆の港に向かい三段に本丸、二之丸・三之丸の石垣を重ね、櫓や塀が並び立つ海城でした。

潮待ち港、商業港として大いに栄えた江戸期の鞆では、弧を描く入り江に沿って大可島から現在の棧橋あたりまで、大石を積んで雁木が整備されました。雁木に沿う浜通には、白壁妻入りの倉が立ち並び、港の正面に石造の「大常夜燈」²³も設置されています。³⁾

今日、海の上から鞆の街・港を眺めると、各時代の海へ顔を向けた街づくりへの取り組みが重なり合いながら今日の景観を形作っていることを確かめることができます。⁴⁾

こうした海からの視点から鞆の港を眺めるには、鞆港から走島あるいは尾道に向かって出港する船に乗り、海の旅を楽しむのがよいでしょう。また大可島から南に延びる「突堤」¹²の先に立ち鞆の港を振り返るだけでも、海へ顔を向けた街づくりの素晴らしさを十分堪能できるでしょう。

- 1) 小野竹喬(1889年～1979年)、現在の岡山県笠岡市に生まれ。文化勲章受章。詩情豊かな名作を多く残している。鞆を題材とした名作を何点も残している。
- 2) 吉田博(1876年～1950年)、現在の福岡県久留米市生まれ。太平洋画会を同志らと発足させる。油彩画、木版画、水彩画で活躍する。鞆をはじめ瀬戸内海を題材にした木版画が有名である。
- 3) 雁木、並び倉、常夜燈は、鞆の港のシンボルと江戸期港町の富貴繁栄のシンボルであり、尾道など瀬戸内の港町はその整備に心を砕いていた。
- 4) 古代中世の社寺は、現在の鞆の街の元となった港や浜に正面を向け開かれて行ったと考えられる。たとえば、現在唯一の中世遺構として残されている釈迦堂³⁴にみられるように、安国寺³⁴とその前身であった金宝寺は、東側の浜へ向けるかたちで七堂伽藍が

置かれていたと考えられる。当時は今日より海岸線が近く境内の際まで水辺が寄せていたと言われている。

【こぼれ話】 鞆の港には北前船が寄港していました。北前船とは、江戸時代から明治にかけて大阪から瀬戸内海、関門海峡を経て北陸などの日本海側の諸港を結び、後には北海道にまで延長された航路と船を指しています。それまでは小浜や敦賀から陸揚げして琵琶湖を経由して大阪に諸物資を輸送していました。西回り航路の開発は、寛文12年(1672年)河村瑞賢によって蝦夷と大阪を直行する航路を開発したともいいます。

北国方面への積荷は酒類、衣料品、タバコ、塩、紙、砂糖、米、縄・筵などのわら製品、ろうそくなどでした。大阪方面へは、ニシン、ニシン粕、数の子、昆布、鰯粕などを積んでいました。鞆港では北海道からのニシン粕などをイ草や綿の肥料としておろし、鞆特産の舟釘や錨、保命酒の他、福山の木綿、松永の塩、沼隈の畳表などを積み込んでいました。明治維新になると、封建制の崩壊、電信・郵便の登場、鉄道の施設などによりその役目を終えました。



木版画「瀬戸内海 鞆之港」、吉田博作（福山市鞆の浦歴史民俗資料館蔵）

2. 近世の都市計画・寺町の形成

鞆城址西側を南北に走る道は、西の山手側に数多くの社寺が建ち並んでおり、いわゆる「寺町」³¹となっています。鞆の寺町は、福島正則¹⁾が鞆城を築いた際に、城郭の外西側に整備されたもので、城下町時代の面影を今日に伝えるものです。鞆城廃城の後には、寺町の東側の城郭跡地は町人地となり、町家が立ち並んで今日の景観となりました。緩やかに折れ曲がる道に土塀が連なる景観は、在りし日の鞆の城下町の姿を重ねてみることができ、数少ない城下町時代の遺構です。

こうした「寺町」の建設は、豊臣秀吉が、聚楽第を築き御土居（土塁）で囲むことで、京都を城下町に改造しようとした際に用いられ、以後、城下町の建設で一般化した手法です。封建的な身分制度に基づき武士・町方と寺社を区分して住み分けさせると同時に、いざという時には、城下町の外郭を守るための砦として使用することを目的としています。

江戸中期に瓦葺きや塗り込め²⁾が普及するまでは、町方は当然、武家屋敷の多くも板葺き藁葺きであり、戦火にはひとたまりもありませんでした。一方、寺院の建物は瓦葺きで、外構も土塀を取り回し、時には堀を回したものもあつたため、しばしば戦の拠点に用いられてきました。織田信長が明智光秀に滅ぼされた際、本能寺を宿所としていたのは有名ですが、鞆でも、かつて広大な伽藍を有していた「小松寺」³²と「安国寺」³⁴が、しばしばこうした用途に用いられています。

鞆城の建設時には、その小松寺と安国寺を結ぶ形で道を作り、その道に沿って社寺を集めて再整備することで、現在の寺町を形成したと考えられます。

また寺町の通りは、北の原の集落と南の平の集落とを、城郭の西端に沿う形で結んでいます。当時の鞆港は、海に面した鞆城の三之丸に組み込まれていたと考えられます。そのため、この道には「原」から「平」の集落に抜けるためのバイパス機能も考えられていたのではないのでしょうか。

城下町の縄張りを考える城主の視点から鞆の街を散策し、城下町の名残を探してみるのも面白いのではないのでしょうか。

- 1) 福島正則は安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将。関が原の戦いで東軍に属して活躍し、安芸と備後の国を与えられ広島城主となった。
- 2) のき裏を含めて全てを漆喰仕上げにしたもの。

【こぼれ話】 寺町の北端に位置する安国寺は、足利尊氏由来の寺であり、鎌倉時代の禅宗建築の面影を伝える重要文化財「釈迦堂」で、全国に知られています。また、福山出身の作家井伏鱒二の晩年の作品である『鞆の津茶会記』(福武書店、1986年)の舞台として、安国寺が登場します。これは天正14年(1586年)から足掛け13年にわたり、鞆周辺で開かれた茶会を記録する形をとった文学作品です。豊臣氏の興亡という大きな時代の変革に巻き込まれてゆく、安国寺^{えけい}恵瓊ら「^{もののぶ}武士」たちの悲哀が静かな口調で描かれています。

【ささやき橋伝説】 寺町通りの山中鹿之助¹⁾の首塚のそばにうっかりすると通り過ぎてしまうほどの小さな橋があります。この小さな橋は「ささやき橋」といい、1500年前の恋物語を今に伝えています。

その昔、百濟から多くの帰化人がやってきていた頃のこと。百濟からの船は必ず鞆に寄港していましたので、大和朝廷から接待官が派遣されていました。その一人であるワタリと、接待の^{うたげ}宴で歌や踊りで一行を慰める^{かんぎ}官妓の一人である江の浦が恋に落ちました。当時役目柄二人の恋は許されないものでしたが、毎夜橋のたもとで密かに会っていたと言います。しかし、やがて皆の知るところとなり、「別れる。別れるならば許す」と迫られましたが、「私たちのきずなは永遠」と愛を貫きました。二人は抱き合えないように後ろ手に縛られ、石重りをつけて海に沈められたと言うことです。その後鞆の人たちは、毎夜その橋のたもとで二人がささやくのを聞いたので「ささやき橋」と呼ぶようになったそうです。

1) 山中鹿之助は山陰の戦国大名の尼子氏の家臣。毛利氏に敗北後、尼子氏の再興をはかるがかなわず、いまの岡山県高梁市で殺された。首級は当時鞆にいた15代将軍の足利義昭のもとに送られた。地元の人が手厚く葬った首塚がいまも残る。



寺町の風景